

浜松城跡 8 次

2013年3月

浜松市教育委員会



例　　言

- 1 本書は浜松市中区元町で実施した浜松城跡の発掘調査にかかる報告である。当発掘調査は、浜松城天守門建設工事（主管：浜松市都市整備部公園課）に先立ち実施した。
- 2 浜松城跡は過去に7次にわたる発掘調査を実施してきた。このことから、当発掘調査を8次発掘調査とする。
- 3 当発掘調査は、浜松市（都市整備部公園課）の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。
- 4 当発掘調査および整理作業の期間は、平成24年（2012）6月1日から平成25年（2013）3月15日である。このうち現地発掘調査は、平成24年（2012）6月4日から平成24年7月4日の間と、平成24年11月19日から平成24年11月30日の間に実施した。総調査面積は62m²である。
- 5 現地調査は影山重広、和田達也（浜松市文化財課）が担当し、熊谷洋子、武田裕美（浜松市文化財課）の補助を得た。
- 6 整理作業は和田が担当し、鈴井けい子（浜松市文化財課）の補助を得た。本書の執筆、編集は和田が行った。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 8 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 9 本書では参考文献などの表記にあたり、以下のような略称を用いる。

教育委員会→教委、（財）浜松市文化振興財団→浜文振

目　　次

例言

第1章　序　　論	1
第2章　調査成果	7
第3章　總　　括	21

図版

第1章 序論

1 調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城跡は、天守曲輪とその周辺が浜松市指定史跡として保護されている。1950年に浜松城公園として整備され、1958年に復興天守が建設された。浜松城跡は現在、市街地においては貴重な緑豊かな空間として、市民から親しまれている。

近年、中近世の城郭がもつ歴史的価値が注目を集め、建物復元などを含めた整備・活用の機運が高まりをみせている。このなかで、2009年に「浜松城公園歴史ゾーン整備基本構想」(主管:浜松市公園課)が策定され、史実に基づいた忠実な復元が可能な建造物として、天守門と富士見櫓の復元が検討された。この構想のもと、2009年と2010年、天守門跡と富士見櫓跡において発掘調査(4・5次調査)が行われ、2011年3月には「浜松城公園歴史ゾーン整備基本計画」(主管:浜松市公園課)が策定された。

この計画に基づき、天守門の建設が具体的に検討され、2011年には櫓台内部の遺構遺存状況の確認調査(6次調査)を実施するとともに、遺構の保護について協議が重ねられた。その結果、天守門建設に伴う遺構面の掘削は最小限に留めるよう調整が進められ、礎石が検出された1階の表層部分と、建物の基礎杭がおよぶ櫓台上面の直径1mの円形部分において、本発掘調査を実施することが決定された。

発掘調査は、浜松市(公園課)の依頼により浜松市教育委員会(浜松市文化財課が補助執行)が実施した。現地調査は、2012年6月4日から7月4日と2012年11月19日から11月30日の2期に分け実施した。総調査面積は62m²である。



Fig.1 浜松城跡の位置

2 浜松城をめぐる環境

地理的環境 浜松城跡は三方原台地の東縁部にあたり、台地の東側を流れる馬込川や天竜川によつて形成された沖積平野を臨む段丘上に築城された、連郭式の平山城である。城域は最大で東西 600m、南北 700m を測り、その周囲は谷や低湿地といった自然の要害や城下町に囲まれている。

歴史的環境 浜松城跡が立地する天竜川流域には、戦国時代の城郭が数多く分布する。戦国時代の遠江は、今川氏、徳川氏、武田氏が覇権を争った地であり、浜松城もその舞台のひとつである。

浜松城の前身は 15 世紀頃に築城された引馬城である。引馬城築城時の城主は不明だが、16 世紀前半には今川氏支配下の飯尾氏が城主を務めていた。この頃の引馬城は、江戸時代の絵図にみられる「古城」と表記された部分であり、現在の東照宮付近にあたる。東照宮の境内からは、15 世紀末から 16 世紀代の遺物が出土している。

徳川家康が 1570 年に引馬城に入城し、浜松城への改称や城域の拡張と改修、城下町の形成が進められた。徳川家康在城における浜松城の具体像は不明確だが、古文書や出土遺物から現在の本丸に向かって、城城が拡張されたことが窺える。また、徳川家康が築造した浜松城は、土造りの城で、石垣や瓦葺建物を備えていなかったとされる。

1590 年、徳川家康の関東移封にともない、東海の諸城には豊臣系の大名が配置された。浜松城には堀尾吉晴が入城し、石垣の築造や瓦葺建物の建設が行われ、近世城郭としての礎が築かれた。

1600 年、閑ヶ原の戦い以後、江戸時代を通じて徳川家譜代大名の居城となり、浜松城から豊臣色は失われていく。江戸時代の浜松城主は九家二十二代を数え、歴代の城主により城域の変更・改修が進められた。

なお、堀尾氏在城期に創建された天守は、江戸時代前期（17 世紀）のうちに姿を消し、天守台のみが現在に伝わっている。以降、天守門が浜松城の最高所に位置する建造物といえ、江戸時代を通して浜松城を代表する建物であったことが窺える。

1873 年の廃城令により、浜松城の建物や土地の払い下げが行われ、三の丸、二の丸の宅地化が進行した。天守曲輪と本丸の一部は大きな開発を免れ、1950 年の浜松城公園開設に至る。

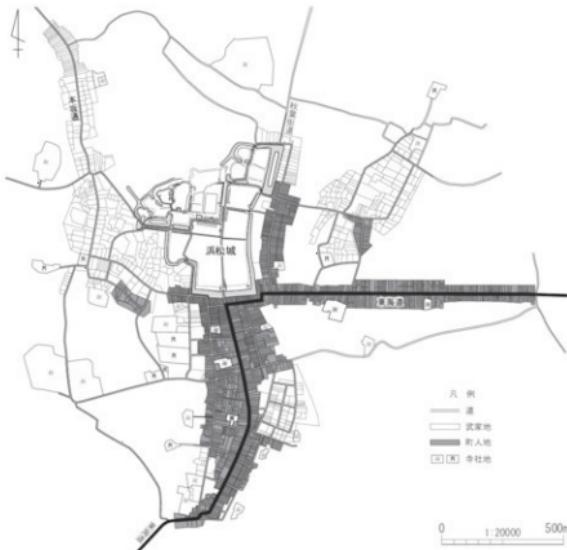


Fig.2 浜松城における城下町の構造

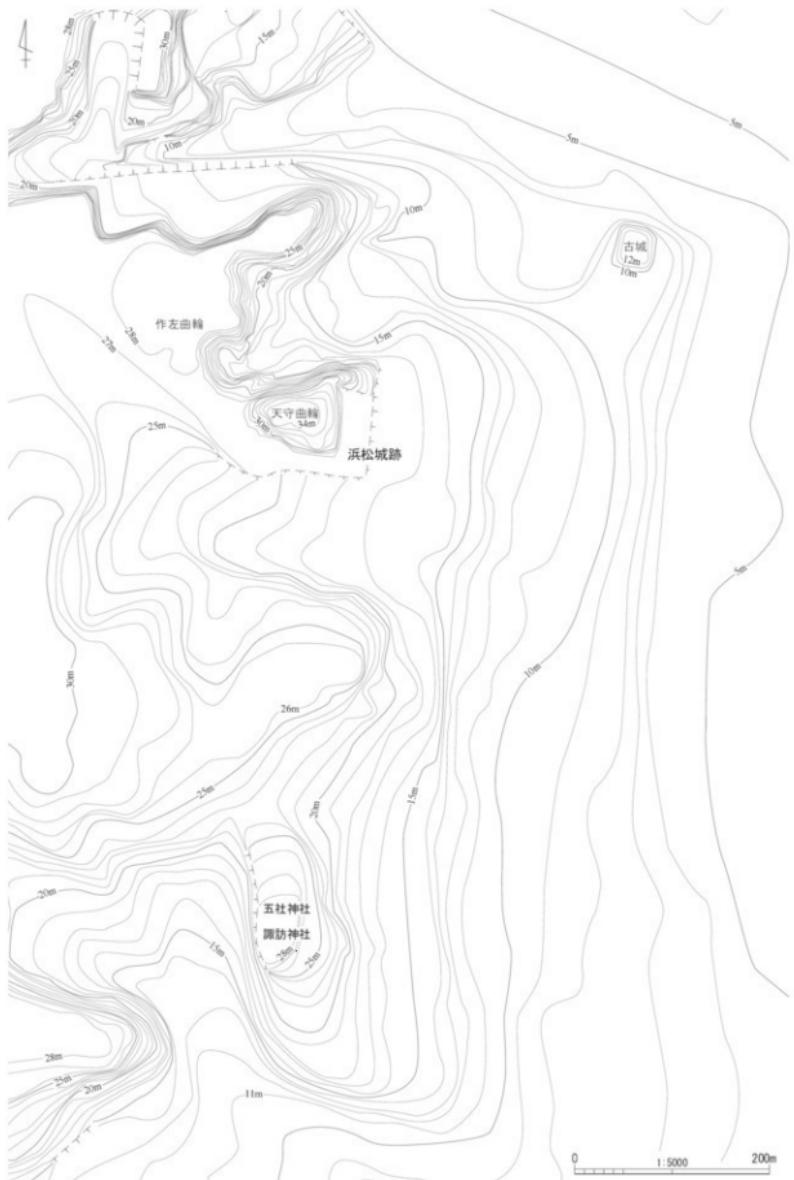
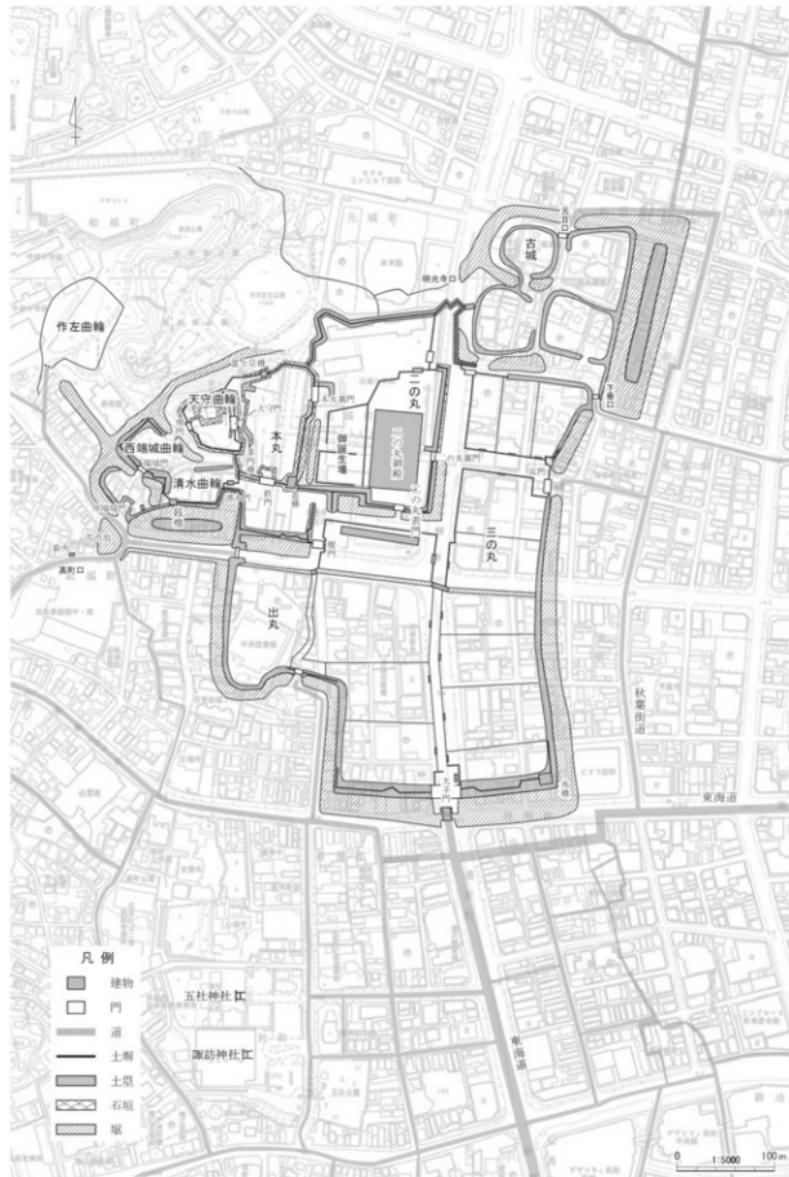


Fig.3 浜松城跡の周辺地形



3 浜松城跡の調査履歴

浜松城跡はこれまで7度にわたり発掘調査が行われ、天守門跡周辺では4度の発掘調査が実施された（3～6次調査）。3次調査では瓦敷き遺構が確認され、瓦も豊富に出土したことから、天守門跡とその周辺に遺構や遺物が残存していることが明らかになった（浜教委 1996）。

4次調査において、3次調査で確認された瓦敷き遺構が天守門に伴う瓦積みの雨落溝であることが

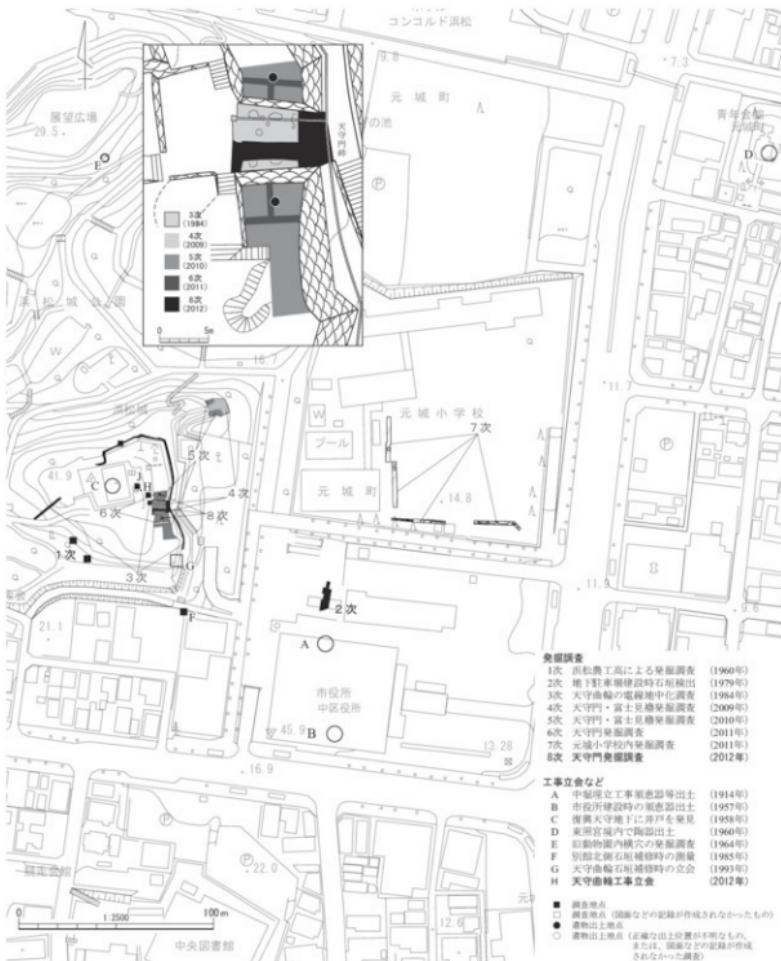


Fig.5 浜松城跡の調査地点

判明し、瓦積みの排水溝が南地区櫓台石垣北端沿いに遺存することも明らかになった（浜文振 2010）。

5・6次調査では、天守門跡の櫓台部分が調査された。5次調査では、天守門櫓部の基礎構造と推定される根石列が検出されたことで、天守門櫓部の規模が明らかになり、『安政元年浜松城絵図』の「桁六間」との整合性が確認された。また、残存石垣との対比から櫓の基底高を標高 37.0m 付近に求めることが合理性が示された。櫓台上からは埴瓦が多数出土し、瓦葺きの土塀が伴うことが明確になった（浜文振 2011）。

6次調査では、櫓台石垣内部の裏込め石が拳大であり、幅は 1m に及ぶことが明らかにされた。また、北地区の櫓台は、江戸時代のいずれかの時期に積み直しが行われた可能性が指摘された（浜文振 2012）。

天守門跡の出土瓦は、堀尾氏在城期に遡るものから本庄氏在城期のものまで含まれ、天守門は 16 世紀末に創建され、少なくとも 18 世紀まで改修・補修を加えながら使用されたことが確認された。

4 調査の方法と経過

調査区の設定 今回の調査区は、天守門建設に関わる天守門の 1 階部分と南北の櫓台上の一部を対象とした (Fig.5)。また、4 次調査により調査された範囲についても再検出を行った。

現地調査 現地調査は、2012 年 6 月 4 日から 7 月 4 日(前期)と 2012 年 11 月 19 日から 11 月 30 日(後期)の 2 期に分け実施した。

前期には、南北の櫓台上に新築される天守門の基礎杭の大きさに合わせ、それぞれ直径 1m の円形に調査を行い、盛土の単位を確認した。また、天守門 1 階部分のうち、4 次調査において未調査部分を層位毎に調査し、4 つの遺構面を確認した。上位礎石抜取穴や瓦積み排水設備の南西隅において、雨落溝と排水溝の接続部分を確認した。調査後は来城者の安全に配慮し、流用土を用いて埋め戻しを行い、旧状に復した。

後期には天守門前面に敷設された階段の撤去部分を中心に調査し、蟻瓦や家紋瓦が出土した。大型礎石設置面と天守門前面には 50cm ほどの高低差があり、石段などの存在が想定されるものの攪乱が著しく、確認することはできなかった。また、4 次調査時に部分的に検出されていた天守門東側の礎石抜取穴の可能性が高い大型土坑の全形を平面検出し、大型礎石の抜取穴であることを確認した。

当発掘調査により、天守門や付属する瓦積み排水設備の構造と時期に関する知見を得たとともに、蟻瓦や家紋瓦をはじめとした豊富な出土遺物を得た。



Fig.6 雨落溝検出作業



Fig.7 整理作業

第2章 調査成果

1 天守門跡の調査成果

(1) 検出遺構の概要

天守門跡1階部分において、4つの遺構面を検出し、大型礎石4石、大型礎石抜取穴(SK01・02)2基、上位礎石抜取穴4基、小穴4基、瓦積み排水設備(瓦積み雨落溝・排水溝)、瓦積み雨落溝を改修した上位雨落溝を検出した。これらの遺構は、4次調査において全体もしくは一部が検出されている(浜文振2010)が、一部のみの検出に留まっていた遺構の情報が追加され、当発掘調査により得られた知見も少なくない。

(2) 天守門跡の層位

天守門跡1階部分は、2009年に発掘調査が実施され、①地山、②大型礎石設置面、③雨落溝設置面、④雨落溝上位面、⑤近現代建物設置面の5つの遺構面に分けられた(浜文振2010)。当発掘調査により調査・確認した遺構面は、上記の②から⑤にあたり、②=大型礎石設置面、③=上位礎石・瓦積み排水設備設置面、④=上位雨落溝・上位礎石抜取穴検出面、⑤=近現代建物設置面にそれぞれ対応する。

②大型礎石設置面は、明黄褐色粘土上で検出された遺構面である。また、天守門前面の一部において、②の下層にみられる盛土の状態を確認した。ただし、掘削のおよばない深さは調査せず、①地山までは確認していない。確認した最下層では豊富に礫を含んだ暗褐色・赤褐色粘質土が確認できる。その上面に礫の少ない褐灰色や赤褐色の粘質土が盛土され②の面にいたる。天守門前面の礎石は2石とも抜き取られているが、礎石抜取穴(SK01・02)の下には黄褐色砂質土が中央を窪ませた状態で確認でき、大型礎石設置前に地業を行ったとみて相違ないだろう。

②の上には、比較的均質な赤褐色粘質土がみられ、この層の上面に③上位礎石・瓦積み排水設備設置面がみられる。

③の上には明赤褐色の地山礫と瓦が豊富に含まれる赤褐色粘質土が面的に認められ、整地土である可能性が想定される。この上面が④上位雨落溝・上位礎石抜取穴検出面である。④の上に褐色砂質土が堆積し、⑤近現代建物設置面が形成される。

このほか、天守門跡前面には、明赤褐色の地山礫を多量に含む赤褐色粘質土が堆積している。この赤褐色粘質土には、江戸時代を通じた瓦が豊富に含まれており、鱗瓦や家紋瓦が出土している。天守門1階部分との併行関係は周辺の擾乱が著しく確認できないが、出土遺物や土層の特徴などから、④と同時期に位置付けられる可能性がある。

(3) 大型礎石設置面の調査

概要 均質な明黄褐色粘土上面(遺構面②に相当)において、長軸が約1mを測る大型の礎石4石と、礎石抜取穴2基(SK01・02)、小穴4基(SP01～SP04)が検出された。これらは、4次調査時に全体もしくは一部が検出されていた(浜文振2010)。当発掘調査により、未検出部分の検出や再検出を行い、礎石抜取穴と捉えられる土坑(SK01・02)の全形を確認した。天守門前面に設置された礎石の規模と位置を復元する根拠となり、天守門の規模や構造を復元する上で有意義な情報を得た。

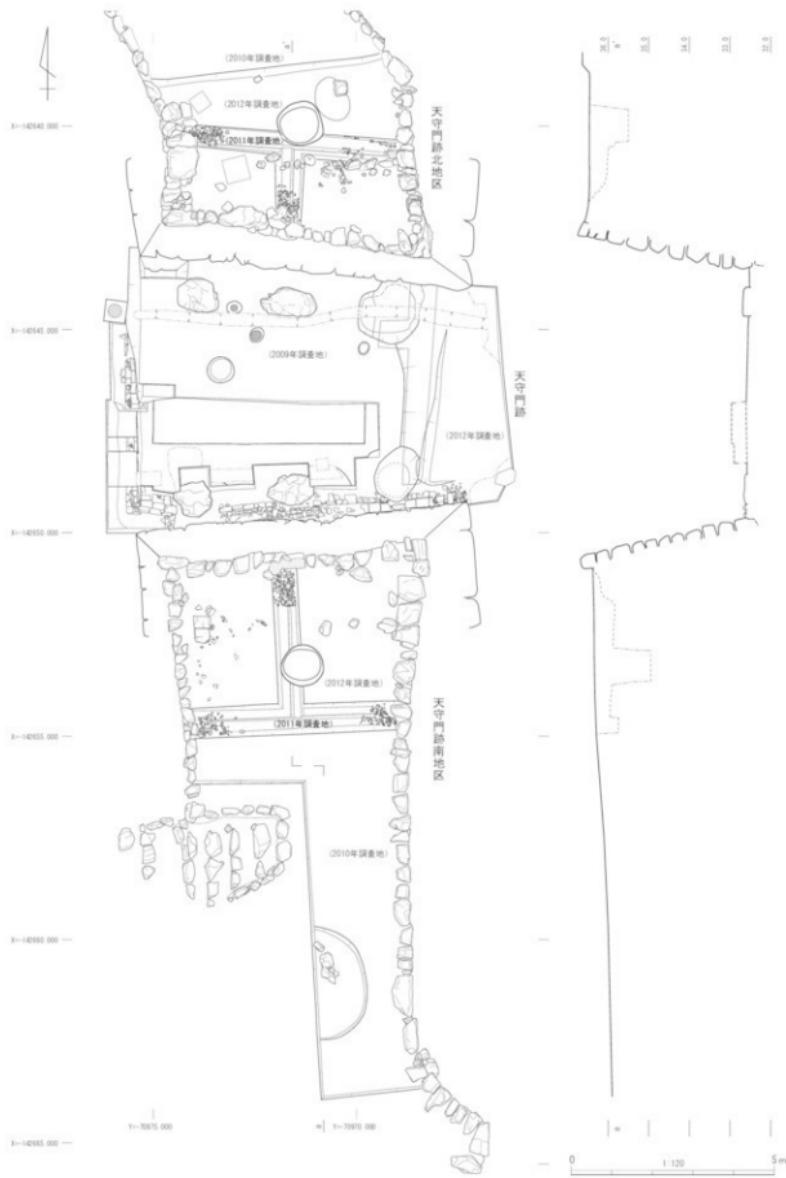


Fig.8 天守門跡 全体図

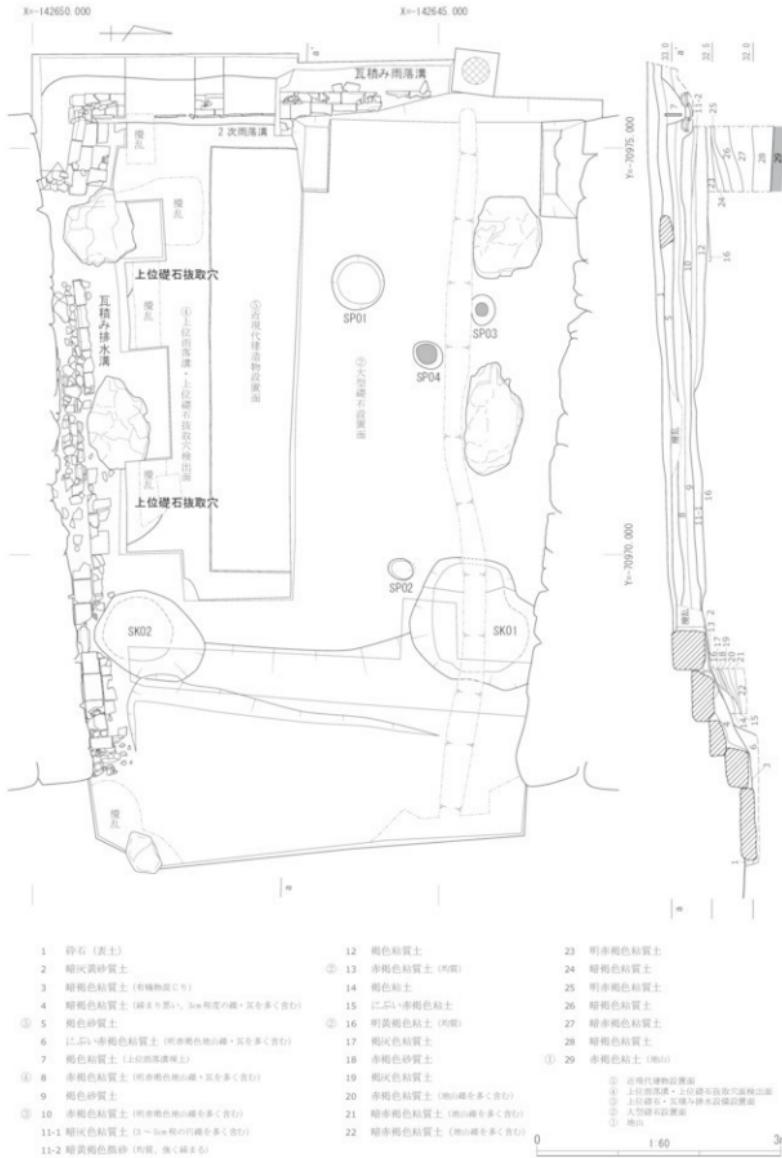


Fig.9 天守門跡 詳細図

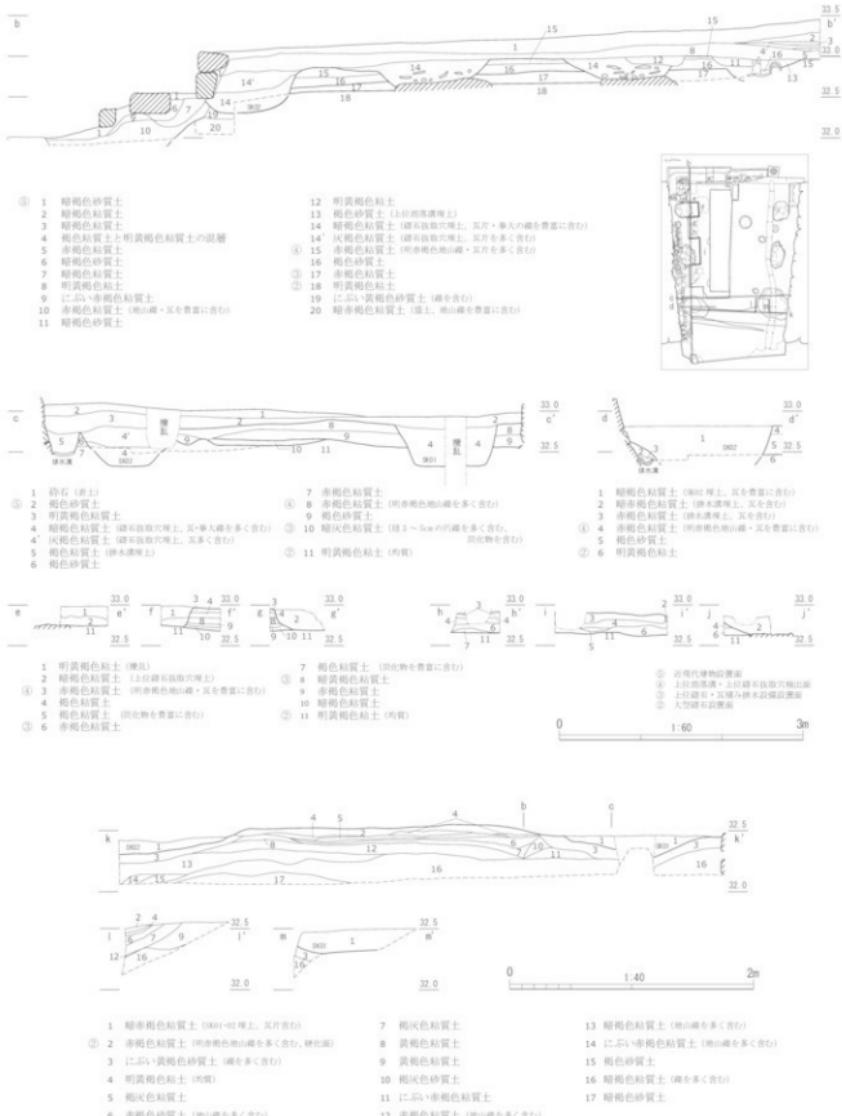


Fig.10 土層断面図

大型礎石 4次調査において大型礎石は4石確認されていたが、南側の2石については、北半分が未検出で、明確な大きさが判明していなかった。当発掘調査によってこれらの礎石の大部分を検出し、南西の礎石が東西約1.0m、南北約0.9mを測り、南中央の礎石が東西約1.1m、南北約0.7mを測ることが判明した。

礎石抜取穴 天守門東側において、2基の大型礎石抜取穴（SK01・02）を検出した。この礎石抜取穴は検出された4石の大型礎石とともに天守門を支えた礎石があった位置とみられる。ただし、これらの礎石抜取りは上位礎石の抜き取りと同時期に行われている。しかし、②の面における礎石抜取穴の大きさから据えられていた礎石の大きさを窺い知ることができる。SK01は、東西約1.6m、南北約1.5mを測り、SK02は、東西約1.1m、南北約1.3mを測る。残存する4石の大型礎石と同じくらいの大きさであったとみてよいだろう。残存する礎石と礎石抜取穴の位置から、櫓台の石垣端面に並行し3つの礎石が並べられていたことが追認された。礎石中央間の距離は東西間がいずれの礎石間も2.3～2.4mであり、南北間の距離は、西側が4.9m、中央が4.5m、東側が4.2mである。

天守門前面 天守門前面には30cm以上の段差1段を含む50cm以上の高低差がみられた。しかし、周辺の擾乱が著しく、詳細は不明確である。石段などの昇降設備があった可能性はある。

（4）上位礎石・瓦積み排水設備設置面の調査

概要 均質な赤褐色粘質土の上面において確認できた遺構面で、③に相当する。4次調査時に確認された瓦積み排水設備（瓦積み雨落溝・瓦積み排水溝）の延長部分を調査し、瓦積み排水設備の全体像が明らかになった。雨落溝は、平瓦と丸瓦を組み合わせて造られ、排水溝は平瓦を主体として造られている。排水設備に伴う礎石は検出されていないが、遺構面④で確認された礎石抜取穴の状況から、排水設備と同一の層位面に礎石が据えられていたと捉えて矛盾はない。

瓦積み雨落溝 瓦積み雨落溝は天守門跡西側において検出された、丸瓦と平瓦を組み合わせて造られた排水設備である。床面はほぼ水平で、凹面を上にした平瓦が並べられている。その東西に1列ずつ凸面を上にした平瓦が並べられ、この上に、凸面を上にした丸瓦を2段積み重ね、側壁をしている。

南西隅で確認された雨落溝と排水溝の接続部では、排水溝の西端に4分割した平瓦を溝の中心に向かって下がるような状態で4段積み上げ、側壁にしている。また、この部分の床面は排水溝と同じ方向に

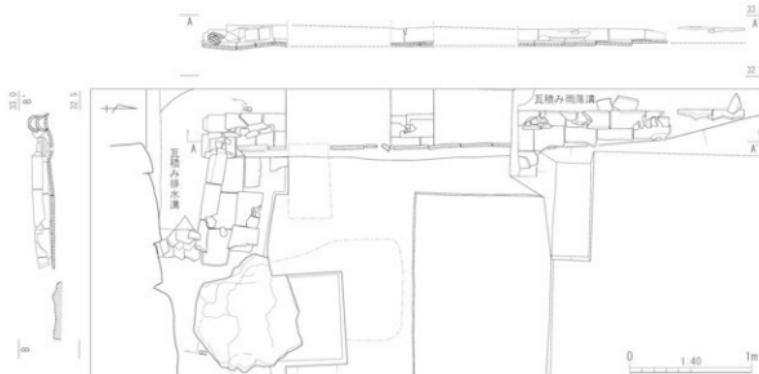


Fig.11 瓦積み雨落溝詳細図

造られている。

瓦積み排水溝 瓦積み排水溝は、天守門跡南橋台石垣の北側に沿って検出された。南西礎石以西は雨落溝と同様に平瓦と丸瓦を組み合わせた構造である。いっぽう、南西礎石以東では、平瓦を中心とした構造である。床面には凹面を上にした1枚の平瓦が敷並べられ、北側壁には、主に半裁された平瓦が用いられ、最大で5段積み重ねられている。背後の盛土との高低差を考慮すると7~8段程度の平瓦が積み重ねられていたと想定される。南側壁は、瓦積みの側壁が認められず、石垣がその役割を担つたと捉えてよいだろう。

また、添柱と近接すると想定される部分のみ、丸瓦が凹面を上に向けた状態で床面に用いられ、半裁した平瓦による側壁はみられない。添柱と排水溝の関係を知る上で重要な見といえる。

南西礎石から南東礎石の間の床面傾斜は東に向けて緩やかに低くなり、南東礎石付近に至ると、床面が急傾斜になる。排水溝敷設時、天守門前面には排水溝と同等の高低差があったとみてよいだろう。排水溝の東端は石垣の東端と一致し、凹面を下に向けた完形の丸瓦が、床面の平瓦に対して直交方向に置かれる。この丸瓦の東西には縄や瓦片が多くみうけられ、暗渠の様相を呈する。

瓦の時期 瓦積み排水設備に用いられた瓦は現地保存されるため、現地で瓦の特徴を部分的に確認した。凸面に縄目タタキ、凹面にコビキA技法や吊り組痕がみられるものが多くみられ、コビキB技法とみられるものが1点みられた。また、編目や



Fig.12 瓦積み排水溝詳細図

内タタキが一部に認めらる丸瓦が添柱近接部位に用いられている。

このほか、排水溝に用いられた平瓦には、凸面にコビキ A 技法がみられるものがある。加えて、平瓦の縦横比（幅／長さ）は 0.70 ~ 0.75 になるものが主体であるが、0.85 になるものも含まれる。0.83 以下のものは 16 世紀末以前、0.83 以上のものは 16 世紀末以降と指摘される（森田 1984）。16 世紀末の瓦を中心につつも、17 世紀以後に属する平瓦も併用された状況がうかがえ、丸瓦から窓える時期とも相違ない。

排水設備の時期 排水設備に用いられた瓦は、16 世紀末から 18 世紀までの特徴を有する瓦のみである。また、瓦積み排水施設の埋土中から細片化した瓦が出土した。雨落溝の埋土は、雨落溝の改修に伴い掘削が行われており、新旧どちらの雨落溝に伴うものか明らかにできないが、19 世紀前半とみられる瓦（Fig.16-27）がみられる。

いっぽう、排水溝埋土は改修や攪乱が少なく、遺物の出土量は少ないものの埋没時期を明らかにしやすい。排水溝の埋土中から出土した瓦は、コビキ B 技法や幅目を有するものが主体である。

層位や上位礎石推定位置との関係から、上位礎石に伴う天守門と同時に、瓦積み排水施設が敷設されたと捉えるのが合理的であろう。また、排水溝が敷設される盛土は、赤褐色粘質土（Fig.10 b-b' 断面 10 層）に切られている。この赤褐色粘質土から出土した瓦には、顕著な内タタキをもつものや凹面にナデを施すものがみられ、排水溝よりも新しい遺物を一定量含む。加えて、排水溝埋土は礎石抜取穴に切られている（Fig.10 d-d' 断面）。これらのことから 18 世紀代に瓦積み排水設備が敷設されたと捉えて矛盾ないが、廃城後に屋根瓦を転用した可能性も考慮する必要がある。

（5）上位雨落溝・上位礎石抜取穴検出面の調査

概要 上位雨落溝と上位礎石抜取穴は、明赤褐色地山礫や瓦片を豊富に含んだ赤褐色粘質土上面

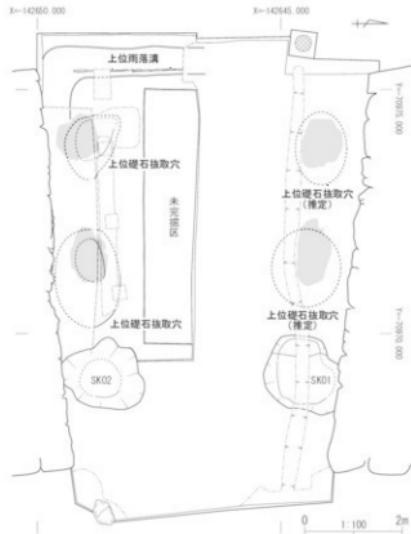


Fig.13 上位雨落溝・上位礎石抜取穴検出面

から検出された。遺構面④に相当する。

上位礎石抜取穴は、4 基確認された。上位礎石抜取穴は、遺構面③において確認された瓦積み排水設備と同じ時期に設置された上位礎石を抜き取ったと捉えられる遺構であり、当時の天守門の規模を知る上で重要な情報を得た。また、上位雨落溝は瓦積み雨落溝の東側壁に沿って平瓦が立て並べられる。

上位礎石抜取穴 上位礎石抜取穴は、4 次調査時に 4 基それぞれの一部が検出・調査された（浜文振 2010）。当発掘調査では、上位礎石抜取穴の未検出部分を検出したが、後世の攪乱を受けており、平面形を窺い知れる程度であった。残存部位から上位礎石抜取穴の平面形を復元すると、復元した上位礎石抜取穴の規模は、大きいもので長軸 2.0m を測るものがあり、大型の礎石であったことが窺い知られる（Fig.13）。上位礎石抜取穴の検出位置をみると遺構面②の大型礎石とほぼ同位置であ

り、遺構面②時の天守門と同規模であったと捉えてよいだろう。上位礎石抜取穴の埋土には、拳大の礎や瓦片がみられる。4次調査で指摘されたように、拳大の礎は上位礎石の下面に栗石として敷き詰められていたと想定でき、瓦片は礎石抜き取り後に混入したと捉えられよう。

上位礎石抜取穴の埋土から出土した瓦には、太田氏在城期（1644～1678年）に製作されたとみられる桔梗紋軒丸瓦（Fig.15-6）や18世紀代に製作されたと捉えられる内タタキが顕著な丸瓦（Fig.16-26）が含まれた。層位との関係を含めると廃城後に礎石が抜き取られた可能性がある。

上位雨落溝 天守門の西側において検出された溝で、検出位置から雨落溝と推定される。瓦積み雨落溝埋没後、埋土を掘削し、瓦積み雨落溝の東側壁付近に平瓦を立て並べ、天守門側の側壁を高くしている。西側壁には改修を窺わせる痕跡はないが、瓦積み雨落溝の側壁である丸瓦が露出し、側壁として機能していた状況が窺い知れる。上位雨落溝の埋土と同質の土が天守門の南西角で屈曲し、東へ向かい堆積している。上位雨落溝においても天守門を「L」字形にめぐると想定されるが、瓦を用いた側壁などの明確な構造物は認められない。

また、4次調査時に上位雨落溝は検出されていないが、平瓦を立て並べただけの簡素な構造物であり、周辺に擾乱も認められることから、遺存状態が悪く認識されなかつた可能性もある。

上位雨落溝の時期は、埋土に明確に伴うと判断できる遺物はないが、近現代の瓦は含まれていない点や上位礎石抜取穴と同一遺構面ということが指摘できる。

（6）近現代建物設置面の調査

概要 暗褐色砂質土上面において、近現代のものと推定される礎石または根石とみられるもの7石と列石を検出した。遺構面⑤に相当する。遺物は、遺構面上から近現代の桟瓦が豊富に出土している。

遺構 暗褐色砂質土上面において礎石、根石と列石を検出した。礎石もしくは根石とみられるものは7石みられ、総じて小振りである。このうち2石は、上部にコンクリートがみられ、礎石とみて間違いない。これら以外の礎石や根石、列石の石材は全て珪岩である。

また、天守門跡西半において列石が検出された。列石は長軸約20～30cm、短軸約10～20cmを測る珪岩が列をして並べられている。列石の役割として、階段や排水設備、仕切りなどが想定される。

近現代に設置された礎石や根石、列石は位置関係から同時期に設置された蓋然性が高い。

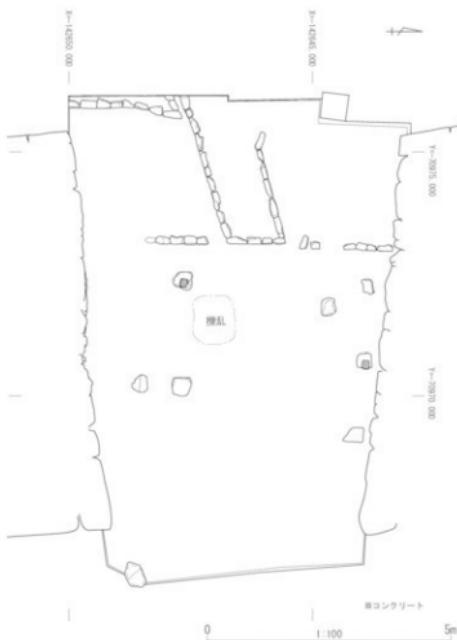


Fig.14 近現代建物設置面

(7) 出土遺物

概要 天守門跡では、上位層から豊富な遺物が出土した。このうち、軒丸瓦 (Fig.15-1 ~ 9)、軒平瓦 (10 ~ 18)、丸瓦 (Fig.16-19 ~ 27)、鰐瓦 (28・29)、須恵器 (30・31) を図示する。平瓦も大量に出土しているが、製作痕跡や全形が窺えず、時期的特徴を示すものがないため図示はしていない。

軒丸瓦 三ツ巴文 (1 ~ 5) と桔梗文 (6 ~ 8)、九目結文とみられるもの (9) が出土した。三ツ巴文のうち、1・2・5は巴の先端が長く、堀尾氏在城期 (1590 ~ 1600 年) に遡るとみられる。3・4は、珠文のみであり、時期は明らかにできない。6 ~ 8は桔梗文を有すもので、太田氏在城期 (1644 ~ 1678 年) の所産とみられる。6・7は桔梗を写実的に表現したものである。8は浜松城跡 3 次調査に類例がある (浜松市教委 1996 : 図 19-66)。9は九目結文とみられ、凹面にはコビキ B 技法と内タタキが確認できる。本庄 (松平) 氏在城期 (1702 ~ 1729 年) の所産とみられる。

軒平瓦 10は宝珠文の中心飾りの両側に子葉をもつ唐草文をあしらうものである。宝珠文の軒平瓦は、浜松城において初出であり、横須賀城跡や久野城跡の出土遺物 (加藤 1993) に類例がある。これらの出土事例から堀尾氏在城期に製作されたものと捉えてよいだろう。11・12は三葉の中心飾りをもつとみられ、この両側に 2 単位半の唐草文をあしらう。過去に浜松城天守から出土した資料に近似し、堀尾氏在城期に位置付けて矛盾はない。13は、5 葉の中心飾りをもち、太めの唐草文を 3 単位あしらう。天守南側斜面からの出土があり、天守が存在した期間内に収まるものと想定してよいだろう。14は五葉の中心飾りをもち、比較的長い 2 単位の唐草文を有す。15・16は三葉の中心飾りの両側に 2 重に表現した唐草文を 2 単位あしらうものである。富士見櫓に類例があり、17 世紀中葉以降の所産とみられる。17・18は小片であり類例もないことから子細は不明である。

丸瓦 19 ~ 21は、凸面に網目タタキがみられ、凹面にコビキ A 技法がみられる。19には吊り紐压痕、20には横縫い取り目、21は目の細かい布目がみられる。これらは、16 世紀末に遡るとみて矛盾はない。22 ~ 25は凹面にコビキ B 技法がみられるものである。22には細かい布目 (9 単位 /1cm) がみられ、24には編目、25には編目と部分的な内タタキがみられる。22は 17 世紀代といえ、17 世紀前半に遡る可能性がある。24・25は 17 世紀後半から 18 世紀代と捉えられ、24の方が古相といえる。26は、当発掘調査において唯一全形を窺い知ることのできる丸瓦である。凹面に顕著な内タタキがみられ、その隙間に編目が残る。内タタキが顕著な点から 25 に後出すると捉えて問題無いだろう。27はナデにより他の痕跡が皆無のものである。時期決定の根拠に乏しいが 19 世紀前半と捉えておきたい。

鰐瓦 鰐部 (28) と胴部 (29) が各 1 点出土した。鰐瓦はいずれも天守門前面の赤褐色粘質土 (b-b' 断面 10 層) から出土した。鰐部は片面のみに線刻表現がみられる。浜松城跡から過去に出土した鰐瓦の鰐部は、面取りにより立体表現されるもの (浜教委 1996、浜文振 2011) であり、表現の簡略化が認められよう。また胴部は、鱗が「C (U)」字形の原体を押しつけることで表現され、鱗同士の重なりは少ない。3 次調査時に天守門跡西側から出土した資料 (浜教委 1996 : 写真 24) に鱗の表現方法が類似する。鰐瓦の鱗表現は、粘土貼り付け→ヘラ描き→「U」字形原体の押しつけの順に変遷することが知られ、「U」字原体の押圧は 1589 年以降の手法とされる (木戸 2008)。当調査により出土した鰐瓦は、過去に天守門跡や富士見櫓跡から出土した鰐瓦に比べ表現が簡略化している。表現の簡略化が製作年代の差と直結すると仮定した場合、浜松城において最も新相といえよう。

須恵器 須恵器は②大型礎石設置面下層の盛土中から出土した。口径 18cm の摘み蓋 (30) と口径 13cm の瓶類の口縁部 (31) である。これらの須恵器は 8 世紀代に位置付けられる。大型礎石設置面の造成時に土砂とともにたらされたと捉えて矛盾はない。



Fig.15 天守門跡出土遺物実測図(1)

正面より上層：1・3・5・10・14・16・18 天守門前面の漆面色和質土：2・7
油墨塗地土：4・11・12・13 上の漆石嵌装穴：6 SK02：8 油墨塗地土：15・4次調査埋土：17



面底處理土: 19 ~ 21・27

排水溝土: 25

瓦面處理土: 22 ~ 24

上位窓石抜取穴: 26

天守門前の赤褐色粘質土: 28・29

②面下層土: 30・31

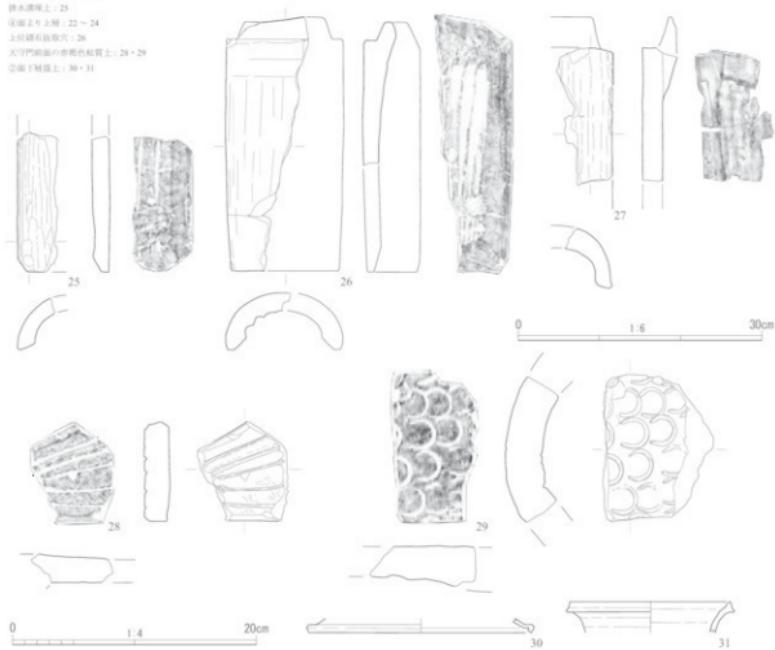


Fig.16 天守門跡出土遺物実測図 (2)

(8) 構台の調査成果

概要 天守門跡の南側と北側に位置する石垣造りの構台の一部を発掘調査し、盛土の状況を確認した。出土遺物は、5・6次調査の埋め戻し土中から出土した瓦のみであり、図示しうる遺物は、出土していない。

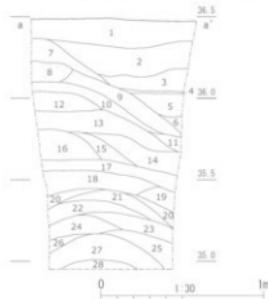
南地区構台の層位 表土下 20 ~ 30cm は 2009 年調査時に発掘調査が行われ、当発掘調査における 2・7 層上面から根石列が検出された（浜文振 2011）。2 層以下は、土質や盛土状況から 17 層を境として上層（2 ~ 16 層）と下層（17 ~ 28 層）に大別できる。

上層と下層の境に位置する 17 層は、褐色粘質土で 3cm 大の円礫や、石垣に用いられる珪岩と同質の礫が含まれ、非常に締まりが強く、硬化している。また、層上面の高低差が 10cm を下回り、この層を境に盛土の状況に差異が読み取れる。

下層の盛土は 18 層以下、赤褐色系土砂と褐色系土砂、黄褐色系土砂が入り交じる状況で盛土が行われる。上層では盛土作業の基準となっていたであろう土山状の盛り上がりをもつ地点が調査区の北壁沿いであったが、下層では、盛土の盛り上がりが調査区の中央でみられる。盛土の単位は、約 15cm である。

上層の盛土は、17 層上面に 16 層を土山状に盛土し、上面が平坦になるように 14・15 層を盛土する。その上に 12・13 層を土山状に盛り上げ、これを基準に南下がりに 7 ~ 11 層の盛土を行い、2 ~ 6 層をほぼ水平に盛土している。上層の盛土に用いられる土は基本的に褐色系土砂であり、一部、帶状に赤褐色の土砂を用いる。盛土の作業単位は約 40cm と言え、石垣は高さ 30cm ~ 50cm の石材が主体を占めることから、関係性が窺える。

北地区構台の層位 1 ~ 7 層は、盛土の単位が大きく、8 ~ 23 層は相対的に盛土の単位が小さい。10 ~ 12 層と 20 層の上面には平坦面が認められ、平坦面間の比高差は 25 ~ 40cm を測る。石垣石材の高さが 30cm ~ 40cm を主体としていることを加味すると石垣築造との関係性が窺える。



- 1 明黄褐色土 (2009 年調査時の現土)
- 2 にごり黄褐色粘質土 (明黄褐色粘質土との混じ)
- 3 褐色粘質土 (2m 大の円礫多く含む)
- 4 半固状質土
- 5 黄褐色粘質土 (2m 大人の胸を多く含む)
- 6 褐色粘質土 (しまり良い、2m 大の円礫・赤褐色シルト質ブロック含む)
- 7 黄褐色粘質土
- 8 褐色粘質土ブロック (しまり良い、白い粘子・1m 大の円礫含む)
- 9 明褐色粘質土 (しまりやや良い、2m 大の円礫含む)
- 10 明褐色粘質土 (しまりやや良い、2m 大の円礫含む)
- 11 褐色粘質土 (にごりややや多い、しまり悪い)
- 12 褐色粘質土 (れんごく 3m 大の円礫含む、13 以上で中央部が強引)
- 13 褐色粘質土 (中央ややまろ良い、12 以上で西側が強引)
- 14 灰褐色粘質土 (しまりやや良い)
- 15 褐色粘質土 (明赤褐色粘質土含む)
- 16 褐色粘質土 (しまり悪い)
- 17 褐色粘質土 (しまり悪い)
- 18 褐色粘質土 (にごりやや多い、3m 大の円礫多)
- 19 明褐色粘質土 (しまり良い)
- 20 褐色粘質土 (しまりやや良い、3m 大の円礫含む、離れて離れて)
- 21 褐色粘質土 (離少)
- 22 にごり・赤褐色粘質土 (離多く含む)
- 23 黄褐色粘質土
- 24 褐色粘質土 (しまり悪い)
- 25 褐色粘質土
- 26 黄褐色土
- 27 明赤褐色土 (赤褐色を含む)
- 28 褐色粘質土

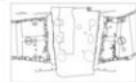
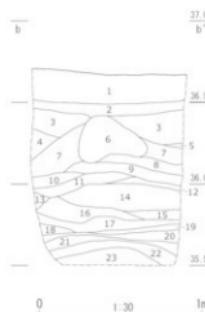


Fig.17 天守門跡南地区構台 土層断面図



- 1 明黄褐色土 (2009 年調査時の現土)
- 2 明褐色土 (半固状)
- 3 明褐色粘質土
- 4 褐色粘質土
- 5 にごり・赤褐色粘質土 (現地を離すほど離少)
- 6 褐色粘質土 (離少)
- 7 褐色粘質土 (離多く含む)
- 8 黄褐色粘質土
- 9 にごり・赤褐色粘質土 (しまりやや悪い)
- 10 明褐色粘質土 (にごりやや多い、明赤褐色粘質土と円礫多く含む)
- 11 にごり・黄褐色粘質土 (離多く含む)
- 12 褐色粘質土
- 13 褐色粘質土
- 14 明褐色粘質土 (しまり悪い)
- 15 にごり・赤褐色粘質土 (14 に比してしまり良い)
- 16 褐色粘質土 (しまりやや良い)
- 17 褐色粘質土 (離少)
- 18 明黄褐色土 (離少)
- 19 明褐色粘質土 (しまり良い)
- 20 褐色粘質土
- 21 明赤褐色粘質土 (しまり良い、離少)
- 22 赤褐色粘質土 (しまりやや良い、離少)
- 23 褐褐色粘質土 (しまり良い、離少)

Fig.18 天守門跡北地区構台 土層断面図

2 天守曲輪 2012 年工事立会における成果

(1) 立会経緯

浜松市公園課により、天守曲輪に植樹されたみかんの植え替え工事が 2012 年 3 月 22 日に実施された。この植え替え工事に伴い、土層の記録と遺物の取り上げを行った。調査範囲は 1.32 m²で、掘削深は地表下約 0.6m である。

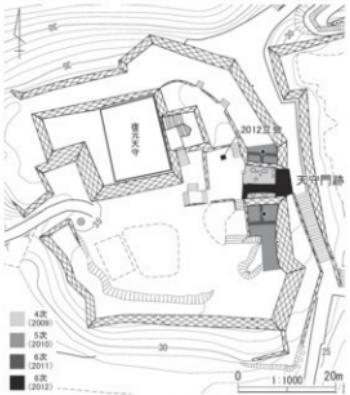


Fig.19 工事立会地点

(2) 検出遺構

層位 対象地の土層は、上から 1 層（暗茶褐色砂質土）、2 層（褐色砂質土）、3 層（赤褐色粘質土）に分けられる。4 次調査（浜文振 2010）において天守門跡北地区で認識された層位と対応し、確認された 3 層は、天守門跡の上位層といえる。

検出遺構 2 層中に瓦が集中して出土する部分が認められ、瓦溜まり（SX01）とした (Fig.20)。

(3) 瓦の出土状態

概要 瓦は包含層中と SX01 より出土した。瓦は、全て破損した状態で出土し、全形を復元できるものはみられない。また、出土状態から規則性を抽出することはできない。

包含層 1・2 層中からは、コビキ A 技法やコビキ B 技法を用いた丸瓦、近世～現代にいたる瓦が出土する。3 層からは、コビキ A 技法を用いた丸瓦が出土した。

SX01 SX01 から出土した瓦は、丸瓦・平瓦・面戸瓦があり、建造物の改修・解体に伴い破損した瓦をこの地に集積・投棄されたものと想定される。

(4) 出土遺物

丸瓦 (Fig.21-1 ~ 6) 丸瓦は 6 点を図化したが、全形をうかがえる資料はない。5 は面戸瓦であるが、丸瓦の側端面を加工したもので、製作技法上の共通性が高いため、丸瓦と共に特徴を記載する。

1 ~ 3 は 2 層中、4 は 1 層中、5・6 は SX01 から出土した。共通する特徴として側端面は 2 面を取りする点や色調が灰色系である点、凸面を長軸方向にナデ調整し、タタキ痕がみられない点が挙げられる。いっぽう、凹面の調整痕跡から 3 大別が可能である。

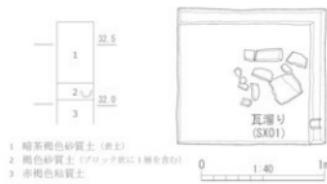


Fig.20 工事立会地点 詳細図

- ①コビキ A 技法を用い、横縫い状の圧痕をもつもの (1・2)
- ②編み目状の圧痕をもつもの (3 ~ 5)
- ③コビキ B 技法を用いるもの (6)

ただし、面戸瓦（5）については 3 方向に 2 面ずつの面取りが確認できる。このほか細部の特徴として、1 には端部付近に棒状の圧痕が認められる。3・5 には吊り紐の圧痕がみられる。(6) は凹面に大量のハナレ砂が付着し、

凸面の一部にも砂粒の付着がみられる。

平瓦 (Fig.21-7～11) 平瓦は5点を図化した。凹面・凸面ともにナデ調整が施されるもの (7・8) 凹面に布目がみられるもの (9)、コビキ A 手法とハナレ砂がみられるもの (10・11) がある。表面は青灰色 (7) や浅黄色 (8)、灰色 (9～11) を呈す。

(5) 小 結

2・3層が包含層として認められ、3層は近世以前の遺物のみ出土する。掘削深よりもさらに下位の層では、安土桃山時代から近世にわたる天守曲輪の遺構・遺物が遺存する可能性を指摘できる。

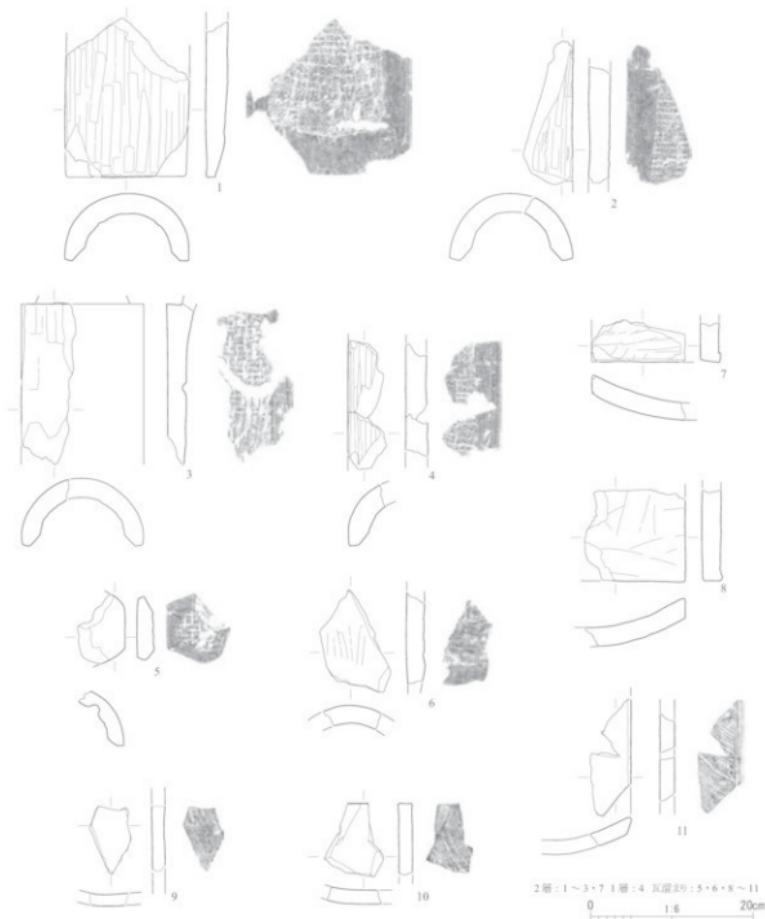


Fig.21 工事立会 出土遺物実測図

第3章 総括

天守門の規模・構造 天守門の規模や構造は、4・5次調査により概ね明らかにされている。当発掘調査の結果、東西礎石の中心距離は、2.3～2.4mを測り、南北礎石の中心距離は、4.5～4.9mを測ることが追認された。檜部分の構造は、5次調査において基底部の標高約37.0m、幅約11.5m、奥行き約5.2mであることや瓦葺きの土塀を伴うことが指摘されている（浜文振2011）。

また、大型礎石設置面と天守門前面には50cm以上の高低差があり、石段などの昇降設備が存在した可能性が想定されるが、遺存状態が悪く、明らかでない。

天守門の時期 天守門跡から出土した瓦には、堀尾氏在城期（1590～1600年）に遡るもののが含まれ、天守と同様に16世紀末の創建とみてよいだろう。天守は17世紀代に消失し、以後、再建されていない。いっぽう、天守門では太田氏在城期（1644～1678年）に製作されたと捉えられる桔梗紋軒丸瓦や本庄（松平）氏在城期（1702～1729年、1749～1758年）に製作されたと捉えられる九目結紋軒丸瓦が一定量出土している。天守門は16世紀末に創建され、17～18世紀にいたるまで改修・改築が行われたことが出土遺物から窺い知れる。

瓦積み排水設備の規模・構造 瓦積み排水設備は、層位面③に敷設された「L」字形の排水設備で、天守門西側の雨落溝と天守門南側の排水溝に分けられる。雨落溝は丸瓦と平瓦を組み合わせて造られ、床面はほぼ平坦になっている。排水溝は、南西礎石以西では雨落溝と同様に丸瓦と平瓦を組み合わせて造られているが、南西礎石以東では、平瓦を主体に造られている。ただし、排水溝と南東礎石の近接部のみに丸瓦が用いられる。この部分は天守門の前面にあたり、鏡柱と石垣の間を埋める添柱が設置される位置である。添柱と排水設備を併存させるための措置と捉えて矛盾はないだろう。

瓦積み排水設備の時期 瓦積み排水設備に用いられている丸瓦は、凸面に網目タタキ、凹面にコピキA・B技法、縞目、部分的な内タタキがみられるものがあり、瓦の時期は16世紀末から18世紀にわたる。また、確実に排水設備の埋土に伴う瓦は、最も新しいもので縞目と部分的な内タタキが観察できるものである。瓦の製作年代は17世紀後半～18世紀代に位置付けられる。

このほか、②に設置されたと推定される南東の大型礎石は、上位礎石と同様に抜き取りが行われており、大型礎石の抜き取りは、瓦積み排水溝の埋没後である。抜き取りの時期は明確でないが、埋土から出土した瓦の特徴は、18世紀代までに製作されたと捉えられるものである。

以上のことから、瓦積み排水設備は18世紀代に上位礎石設置とともに敷設されたと捉えるのが合理的と考えられる。しかし、いずれも状況証拠である。排水設備に近代瓦が含まれないのは、近代に建てられた建物の屋根瓦が落下・埋没する前に埋没したと捉えることもでき、天守門の屋根瓦を廃城以後、瓦積み排水設備の構築材として転用したものと捉えることも可能である。

遺構面の時期 天守門跡は16世紀末に創建された檜門であり、17・18世紀を通じて継続的に改修が行われたことが出土遺物から確認できる。各遺構面の時期については、不明確な部分が多いものを見通しを示しておきたい。

①は調査がほとんどされておらず不明である。②は、③に敷設された排水設備の瓦が16世紀末から18世紀のものであり18世紀を降ると考え難い。③は、上位礎石や瓦積み排水設備が設置された面で、遺構の切り合いや遺物の状況から18世紀代に求めることも許されよう。④は、上位礎石抜取穴に含まれる瓦の特徴や同層内に大量の瓦片を含むことから廃城時を中心とした時期を推定しておきたい。⑤は、礎石上にコンクリートを施すなど、（近）現代に位置付けて問題無いといえる。

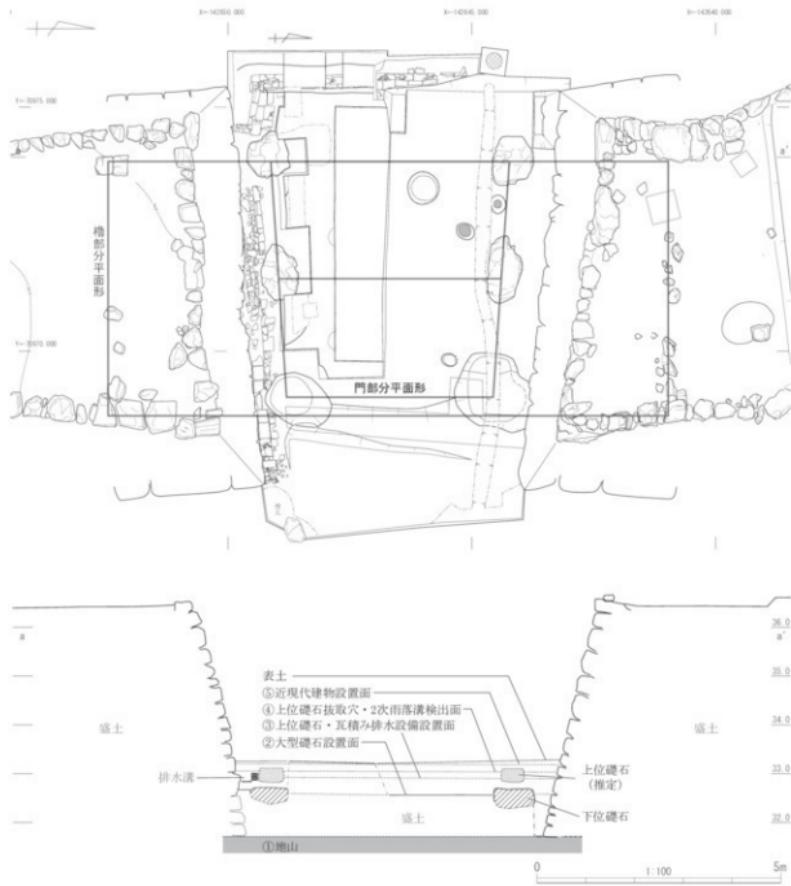


Fig.22 天守門跡復元図

〔参考文献〕

- 加藤理文 1993 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城跡IV』袋井市教育委員会
 加藤理文 1994 「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集
 加藤理文 2012 『織豊権力と城郭』高志書院
 木戸雅寿 2008 「城郭における舗瓦の成立と展開」『季刊考古学』103号 雄山閣
 浜松市教育委員会 1996 『浜松市指定文化財 浜松城跡－考古学的調査の記録－』
 (財) 浜松市文化振興財团 2010 『浜松城跡 4次』
 (財) 浜松市文化振興財团 2011 『浜松城跡 5次』
 (財) 浜松市文化振興財团 2012 『浜松城跡 6次』
 森田克行 1984 「畿内における近世瓦の成立について」『浜津高瀬城本丸跡発掘調査報告書』高瀬市教育委員会
 山崎信二 2008 「近世瓦の研究」

報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡 8 次（はままつじょうあと 8じ）							
編著者名	和田 達也							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2013年3月15日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22202	01- 04- 13	34 度 47 分 30 秒	137 度 45 分 15 秒	2012 年 6 月 4 日 ～ 7 月 4 日 11 月 19 日 ～ 11 月 30 日	62 m ²	緊急発掘
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物	特記事項			
浜松城跡	城跡	安土桃山時代 江戸時代		瓦	天守門跡に付属する瓦積み排水設備の全體像を確認			
要約								
浜松城跡は、浜松市中区元城町にある城郭で、天守台や石垣を有す平山城である。発掘調査を実施した天守門は、安土桃山時代から江戸時代を通じて存在した瓦葺きの櫓門である。4つの大型礎石と2つの礎石抜取穴、瓦積みの排水設備を検出し、天守門跡の建造物と排水設備の構造が明らかになった。江戸時代の浜松城を代表する建造物である天守門の様相をより明確に復元しうる成果を得た。								

浜松城跡 8 次

2013年3月15日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市市民部文化財課
(教育委員会の補助執行機関)

発行機関 浜松市教育委員会

印 刷 松本印刷 株式会社



天守門跡 全景（南東から）



1 天守門跡 ②大型礎石設置面下層の盛土調査状況（北東から）



2 遺構面②下層の盛土状況（1）（東から）



3 遺構面②下層の盛土状況（2）（北から）



4 遺構面②下層の盛土状況（3）（南西から）



1 天守門跡 ②大型礎石設置面 検出状況（北西から）



2 南側大型礎石検出状況（東から）



3 大型礎石抜取穴検出状況（東から）



4 大型礎石抜取穴・排水溝土層堆積状況（東から）



天守門跡 瓦積み排水設備検出状況（南西から）



1 天守門跡 瓦積み排水溝検出状況（北東から）



2 瓦積み排水溝検出状況（北西から）



3 瓦積み雨落溝検出状況（南西から）



1 天守門跡 ④上位雨落溝・上位礎石抜取穴検出状況（南東から）



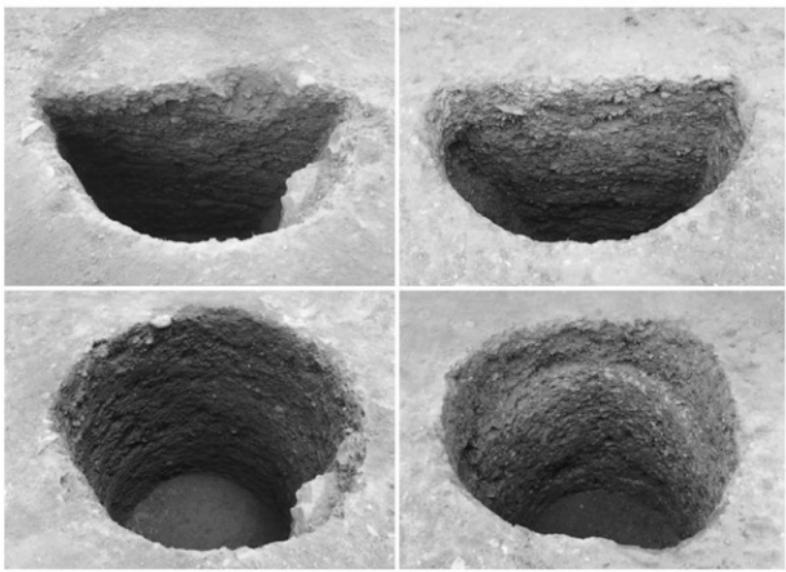
2 南中上位礎石抜取穴検出状況（南東から）



3 南西上位礎石抜取穴検出状況（南東から）



1 天守門跡 ⑤近現代建物設置面検出状況（南東から）



2 天守門跡 南地区櫓台調査状況（西から）

3 天守門跡 北地区櫓台調査状況（南から）



1 天守門跡 出土軒丸瓦

2 天守門跡 出土軒平瓦



3 天守門跡 出土遺物

Hamamatsu Castle

The 8th excavation report

A Report of Archaeological Inverstigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan



March,2013

Hamamatsu City Board of Education